

テキスト

ヨハネによる福音書 15章11～17節

参照教理問答

子どもカテキズム 問 39, 40, 65

ウェストミンスター小教理問答 問39, 40, 41

〈聖書テキストの解説と黙想〉

この箇所は、直前の「ぶどうの木」の話と一連のものとして書かれている。主イエスがまことのぶどうの木で、父なる神が農夫（1節）、そして私たちは枝である（4節）。ぶどうの枝は木を離れては、実を結ぶことができない（4節）。しかし、木に繋がっていれば、豊かに実を結ぶ（5節）。この譬えによって、主イエスと繋がっていることの重要性が記される。繋がっているなら、「望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。」（7節）と言われている。主は弟子たちをこよなく愛してこられた。そして、その主の愛にとどまるように言われている（9節）。主の「愛にとどまっている」ことは、実際に「主イエスの掟を守ること」であると言われている（10節）。主イエスが父なる神の掟をことごとく守られたように。

11節 主が13章から始まる一連の告別説教を話されたのは、主の喜びが私たちの内にあり、私たちの喜びが完全に満たされるようになるためである（11節）。実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる（2節）。私たちは、主イエスの内にとどまっていなくては、実を結ぶことはできない（4節）。どのようにしたらとどまることになるのだろうか。主イエスの掟を守るなら、主の愛にとどまっていることになる（10節）と言われている。

12節 わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。主イエスの掟とは、主が私たちを愛されたように、互いに愛し合うことである（12節）。主イエスへの愛は、互いに愛し合うことによって実証されるのである。しかも「わたしがあなたがたを愛したように」とは、十字架に掛かり、私たちの罪の身代わりに死んでくださった主のように、愛しなさいということである。

13節 友のために自分の命を捨てること、これ

以上に大きな愛はない。主イエスは、これからご自分が多くの者たちの為に十字架の上で死なれることを、念頭において話しておられる。主イエスは弟子たち、そして私たちのために命を捨てて下さった。これ以上大きな愛はないと述べられる。主は最高の模範を示して下さっているのである。主は私たち相互の間にも、ご自身の愛の性格と同じものを、求めておられる。とてもできそうになくとも、主がそのように互いに愛し合うことを求めておられ、それが主の御心であることを覚え、愛を願い求め、相互に愛することに励むべきなのである。

14節 主イエスはこの弟子たちのことを、もはや僕とは呼ばずに「友」と呼ぶと言われる。旧約においてはアブラハム、モーセ、預言者や他の敬虔な人たちが「神の友」と呼ばれている。新約においては、そのような言い方はここだけである。

15節 主が弟子たちを「友」と呼ばれたことは、主ご自身の主権においてなされたものである。主イエスが、父なる神様から聞いたことを全て、弟子たちに知らせられたから、と記されている。僕は命じられたことをするが、主人の心を何も知らない。しかし友人は友の心を良く知っているものである。主イエスが、父から聞かれたことを全て啓示されたので、弟子たちは、神の御心を知る者とされたのである。私たちは、弟子たちを通して伝えられた御言葉を通して、弟子たちと同じように、神様を知る者とされた。神を啓示なさった御子イエス・キリストにより、私たちは、神がどのようなお方であるかを知る者とされた。聖書の言葉を通して、神様が何を喜ばれるか、何を望んでおられるか、何を目的としておられるかを、私たちも知る者とされた。

それゆえ、この一連の御言葉を自分たちへの呼びかけとして受け取る。この弟子への命令は私た

ちへの命令でもあるのである。それゆえ私たちも、主の命令に、自由と喜びを持って従う者とされた。

16節 あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。

「主を選んでくださった」との慰めに満ちた言葉。他にもない「主が」御自身の主権をもって選んでくださっている。それは、私たちが「出かけて行って」「実を結び」「その実が残るように」なるためであるとある。内省的になって自分の信仰の純粋性を求めるのではなく、出て行くことが目的とされている。出て行って実を結ぶこと、そして、その実が残るためである。広い意味で、神様の栄光のためになされる私たちの生き方全体が、私たちの結ぶ実でもある。しかし、狭い意味での伝道によって刈り取られる実、即ち、信じて救われる人たちが視野に入っていることは間違いない(マタイ28:19~20)。いずれにせよ、私たちの結ぶ実が「残ること」を主は想定されている。主はまた「わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである」とも語られる。主は、従おうとする私たちの祈りを聞いてくださるのである。主イエスは今日も、熱心にとりなしてくださっている。

17節 互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。12節で語られたことが繰り返される。「互いに愛し合う」ということは、主を信じる者の生き方の中心的なことなのだ。主の愛に導かれる時にのみ、私たちは友をぶどうの木である主イエスに結び付け、彼らに主イエスの賜物を分

かち合う者になることができる。私たちも、主イエスご自身に繋がりつつ、主の愛に根ざして、初めて、互いに愛することができるようにされる。教会においては、主の愛に根ざした信仰者相互の愛が、互いを結び付け、教会を形成し、力付けるのである。私たち教会共同体がなすべき大切な主からの命令が、他にもない、「互いに愛し合うこと」なのである。教会共同体が互いに愛し合い、主にとどまりつつ、出て行くとき、必ず実を結ぶ。永遠に残る実を結ぶ。主が御自身の助けによって、伝道を進展させてくださるからである。

生まれながらの私たちには、互いに愛し合うことは、自分の力だけではできない。しかし、主が父なる神様のもとから、助け主を遣わしてくださる(26節)。このお方は真理の霊であられ、主イエス様について証しをなさる(26節)。この聖霊の助けと、力強い導きによって、私たちも神に従うことができるようにされるのである。

弟子たちは聖霊によって強められ、命を掛けて主の証人として歩み、教会が誕生した。そしてやがて新約聖書が記された。主イエスを信じる私たちも、聖霊の導きによって助けられ、力付けられ、教会の一員として生きる。主の命令に従うために、熱心に悔い改め、古い自分を捨てて生きる。それは、主の命令でもある。聖霊に導かれ、助けられて、教会において、互いに愛し合い、主の命令を守る。それが主イエス様の愛にとどまる生き方である。主の愛にとどまり、主の掟を守る者は、実を結ぶ者とされるのである。(袴田清子)



テキスト ヨハネによる福音書 15章11～17節
子どもカテキズム 問65

(単元のねらい)

教会を建てるために十字架に赴かれた御心に従い、互いに愛し合う共同体を築こう。

互いに愛し合いなさい

主イエス様は、十字架にお掛かりになられる前に、弟子たちに特別に説教をなさいました。その中でイエス様は「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。」と話されました。

イエス様がぶどうの木で、父なる神様が農夫であられるのです。弟子たちはイエス様というぶどうの木の枝なのです。枝は木に繋がってなければ、実を实らせることはできません。ましてや、木から離れると、実を結ぶことはできません。枝は、木から離れるとやがて枯れてしまいます。

このお話を用いて、イエス様は、弟子たちが主であるご自身に、繋がっていることの大切さをお話しになりました。

人がイエス様に繋がっており、イエス様もその人に繋がってくださるなら、その人は豊かに実を結ぶのです。弟子たちは、イエス様を離れては、何もできないからです(5節)。

イエス様は、「わたしの言葉があなたがたの内にもいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる」(7節)。とも言われました。人がイエス様に従って豊かに実を結び、弟子となるなら、父なる神様が栄光をお受けになるのです(8節)。

主は、父なる神様が、イエス様を愛されたように、私たちを愛されてきたと言われます。そして主の愛にとどまりなさいと言われます(9節)。主イエス様は、父なる神様の掟を完全に守り通し、父なる神様の愛にとどまっておられました。弟子たちも、主イエス様の掟を守るなら、その愛にとどまっていることになると言われました(10節)。

イエス様の掟を守ること、イエス様の愛にと

どまることは、同じなのです。

イエス様の掟とは、どのような掟なのでしょう。12節には「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」と記されています。十戒も神様からの掟です。しかしそれと共に、イエス様を信じる者同士が、「互いに愛し合う」ということが、イエス様の掟だと言われているのです。

そして、13節では、「友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」と言われました。つまり、イエス様ご自身が、まず、一番大きな愛を示されたことが述べられているのです。イエス様が示された最高の愛は、私たちの罪の身代わりには十字架にお掛かりになられることでした。イエス様は最高の愛で、私たちを愛し、最後までその愛を貫き通してくださったのです。そして、このイエス様の愛を模範として、互いに愛し合いなさい、と命じられているのです。その命令を行うなら、私の「友」だと言われています(14節)。

イエス様は、ご自身を愛する一人一人を愛しておられます。だから、私たちも、イエス様の愛しておられる一人一人を大切に思い、イエス様の愛によって、互いに愛し合うことを、願っておられるのです。

そんな愛は到底無理だ、と思う人がいるかもしれませんが、そのように愛し合うことが、イエス様の友となることなのです。自分にはできないなどと思って、主イエス様の御心を重んじ、神様の求められる愛を追い求め、お互いに愛し合うことに励まなくてはなりません。

15節でイエス様は、「もはや、わたしはあなた

がたを僕とは呼ばない。……わたしはあなたがたを友と呼ぶ」とおっしゃっています。神様に「友」と呼ばれた人は、旧約聖書に出てくるアブラハムや預言者たちだけでした。そのような人たちに対してと同じように、主イエス様は弟子たちに対して「友」と呼んでおられるのです。

それは、神の子であられるイエス様ご自身が、父なる神様からお聞きになったことを全て、弟子たちに教えられたからです(15節)。奴隷や使用人は、主人の心を知らずに、命じられたことをする者にすぎません。しかし、主イエス様は、父なる神様からお聞きになった、全てのことを、弟子たちにお知らせになりました。神様の心の内を打ち明けられたのです。それ故、弟子たちのことを「友」と呼ぶ、と言われるのです。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」。主イエス様は、弟子たちを主権的に選ばれました。それは、弟子たちが出かけて行って、実を結び、その実が残るようになるためだと記されています(16節)。自分の聖さだけを、ひたすら求めるような生き方ではなく、「出かけて行って」「実を結び」「その実が残るように」なることを、主は目指しておられるのです。

「実」とはなんでしょうか。私たちが、イエス様の栄光のためになす全てのことは、実です。しかし、それだけではなく、実とは、弟子たちがイエス様の教えと救いの御業を語ることで、「信じる人達」のことも指しています。イエス様はマタイ28章の19～20節において、命令なさいました。「行って、全ての民をわたしの弟子にしなさい」。イエス様を信じていない人たちがイエス様のことを知り、弟子として従うことを、神様は望んでお

られます。

そして、その使命のために「わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、あなたがたを任命したのである」と言われています。

それから、再び同じ命令を繰り返されます。「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」(17節)。

教会において、仲間割れや、喧嘩が起こることがあります。罪人の集まりでは、避けられないことです。しかし、主イエス様は「互いに愛し合いなさい」と命じておられます。

一度仲たがいがいた人とは、どうてい仲直りできないと思うかもしれません。もう二度と話しをしたくない、と思うかも知れません。確かに生まれながらの私たちには、互いを愛し合うことは難しいことでもあります。私たちは、イエス様のように、罪人のために犠牲になるような愛は、とても持ち合わせていないかもしれません。しかし、神様は罪人である私たちの為に、実際に独り子であるイエス様をささげてくださいました。そしてイエス様は実際に、父なる神様の御心に従い、十字架で私たちの罪の為に死んでくださったのです。

神は愛であられるので、互いに愛し合いなさい、と命じられ、その掟を守るなら、主イエス様の愛の中にとどまっていることになる、と言われるのです。

愛の無い私たちには、助け主が与えられています。聖霊なる神様の助けによって、イエス様の御心を確信させられ、助けられ、力を与えられ、勇気を与えられて、愛することができるように、祈り求めましょう。(袴田清子)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 15章26～27節

わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。
あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。

〈ねらい〉

イエスさまにつながることによって、互いに愛し合いながら生きられるのだということを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

「互いに愛し合いなさい」と命じられたイエスさまのお言葉を、子どもなりに理解するとどうなるのでしょうか。ひとことで言い表すことはとても難しいことですが、仮に「喧嘩をすることなく仲良くする」というふうに考えてみましょう。一緒に生きる人たちと仲良くし、相手を思いやることは大事なことです。ただ、このことは何も教会共同体の中だけではなく、幼稚園や保育園、学校や家庭の中でも教えられています。でも聖書が教える愛は一般的に教えられていることではありません。聖書が語る愛の特徴は、「イエスさま」とつながることによって生まれる実りであるということです。

子どもたちは、小さいなりに、誰かと一緒に生きていくことの大変さをよく知っています。愛することの難しさ、憎しみの虜になっている自分の惨めさを知っています。しかし、愛に生きられない自分の罪を知りながら、それに打ち勝つことができず、欲望のままに友だちに暴言を吐いたり、手を出してしまったりするのです。小さければ小さいほど自分の欲を制御できない弱さをも抱えていることでしょう。何度言われても、学校や親から教えてもらうように、皆と仲良くすることができません。仲良くしていても、実際は仲の良い振りをしているだけで、内心「あんなやつ！」と怒

りに駆られながら生活している子どもたちもいることでしょう。

でもそういう私たち大人や子どもを、イエスさまは選んでくださいました（ヨハネ15:16）。私がおりこうさんだからではありません。喧嘩をしないからではありません。私がどういう人間であるかにかかわらず、イエスさまは私を救うために選び出してくださいました。

そしてイエスさまは私たちのことを「友」と呼んでくださるのです。私がイエスさまを愛することができなくても、イエスさまは私のことを最後まで愛してくださいます。その大きな愛を十字架の上で示してくださいましたのです。十字架に示された大きな愛によって、私たちの罪は覆われ、赦されました。このイエスさまにつながっているのですから、私たちは必ず豊かな実を結びます（ヨハネ15:2）。それも小さな実ではなく、豊かな実を結ぶのです。イエスさまの愛を知るまでは決してできなかった本当の愛に生きられるようになるのです。

毎週、教会に来て礼拝を捧げるのは、今日も、私はイエスさまとつながっているんだ。イエスさまに愛されている人間なんだ。こんな私でも愛に生きられるんだという恵みを繰り返し聞くためなのです。

〈祈り〉

イエスさまとつながって歩めることを感謝いたします。イエスさまが私を愛してくださいましたように、私も色々な人たちのことを愛することができますように。

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。あなたがたも、初めから私と一緒にいたのだから、証しをするのである。」
ヨハネ15:26~27

・聖霊とはどなたでしょう。
→三位一体の神様です。イエス様が天に昇った後お弟子さんたちに降った神の霊です。人の霊ではありません。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

・イエス様が送ってくださった聖霊によらなければ、お弟子さんたちは、イエス様の新しい掟を守ることはできません。イエス様がくださった新しい掟はなんですか。

→「互いに愛し合いなさい」。
・「互いに愛し合いなさい。」とはどういう意味ですか。自分の言葉で言い直してみよう。

→お互いを大切にする。お互いのことを思いやり、理解したりする。相手のことを自分の事柄に大切にする。イエス様がお弟子さんたちを愛してくださったように愛する。etc

・イエス様からみて、お弟子さんたちはどんな人だったでしょうか。優れた人？ 信仰深い人？ 立派な人？ 言うことを良く聞く人？ イエス様の言うことをよく理解する人？

→お弟子さんたちはイエス様に呼ばれて従っていた人たちですが、優れた人でもなく、信仰深くもなく、立派でもなく、言うことを守れなかったり、イエス様の言っていることを理解できなかったりしました。

・イエス様から、お弟子さんたちはどのように思われていたのでしょうか。

→この人から何からもらえる、とか、この人のおかげで、自分の評判は良くなるとか、自分は偉くなれる、とは思っていませんでした。でも、

この人たちを愛することが、父なる神様の喜ぶことだと知っておられました。

・お弟子さんのどんなところをイエス様は愛したのでしょうか。
→愛すべきところがあったから愛したわけではありません。イエス様が一方的に愛してくださったのです。だから、互いに愛し合いなさいとは、愛する点がある人だけが愛されるのではなくて、どんな人でも互いに愛し合うべきだということなのです。

2-2. お弟子さんたちのことを考えよう。

・お弟子さんたちは、誰が一番偉いかとか、どうしたら人生を成功できるかということばかりを考えていました。でも友のために自分の命を捨てるのが最も大きな愛だと聞いたとき、どんな気持ちでしたでしょうか。

→友のために自分の命を捨てるたくないけど、神様はそういうことを願っているのなら、しないといけないのかなあ、と驚きと不戸惑い、など。

・友のために自分の命を捨てるのが最も大きな愛だと言った後、お弟子さんはイエス様に何と言われて励まされましたか。

→あなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに教えたから。

2-3. 私たちのことを考えよう。

・私たちの周りにいる人で大切にしたいと思えない人はいますか。あるいは、誰かが自分を大切にしてくれないという人はいますか。

→まず、私たちがイエス様につながってイエス様の愛をしっかりと受けとめましょう。そして、私たちが互いに愛し合えるように、聖霊を豊かに注いでくださるよう、お互いに祈り合ひましょう。

3. ゲーム

UNO やトランプ。一番負けた人は、罰ゲームで、勝った人たちのいいところを、一つずつほめなければいけない。